到られた時鳥飼部の人々が夕の御膳を奉つたといふ傳へがあり、昔日の獻饌に因んで今も鳥飼氏の子孫に當る宮座十二軒大行事小行事の人々が、强飯二升を藁苞に包んだ御供三十本御膳三十膳及び奉書紙で新穀玄米を俵の形に包んだ御幣を二本立てた幣ほぐりといふものを古式によつて供へ神を祭るが、これによつて宮座が氏神と古來深い關係があり、座人・座衆の家筋資格が定まつてをり、祭祀を行ひ神饌を捧げてゐたことが判る。遠賀郡岡垣の大年神社もこれらの宮座行事が嚴重に行はれてゐる。

志賀海神社の宮座は頗る嚴重なものがある、卽ち舊九月九日國土祭當日氏子のその年に生れて百日を經たる小兒を母が懷にして阿曇家に參り座帳に記入して貰ひその子年老いた後は古老として氏神に奉仕すべきを誓つた、古老二十一人禰宜座・大宮司座・別當座・檢校座・宜別當座・樂座がある。筑前續風土記には「糸島郡櫻井村の夷社・熊野社・荒神三社の祭儀は、鬼塚・藍田・長田・高川田・高花木の五箇村で勤め、この五箇村の內に神事を掌る座と云ふのが十二人あり、祭儀が終るとその年の座に當つた家では村民を饗應する、その座頭の牟田氏と次の大長田氏とは古來傳はれる座職とて左右に坐するを定法としてゐる」と見えてゐる。宗像神社の古式祭の時には宮座の人々が舊例による神饌諸品を獻備してゐるし、福岡市比惠の山王社では五軒の宮座の家で社に供物し當屋では二三日日氏子をよんで酒や甘酒を出す、宮地嶽では一月廿二日宮座祭を行つてゐるし、姪濱の住吉神社では大宮座から特殊の獻饌式がある。筑紫郡春日神社にも古くから三十三軒の宮座があり、山家村寶滿宮には廿四戸の宮座があつて神樂が奉納され、糟屋郡部木八幡宮には十二軒の宮座があり頗る嚴重な儀式がある。

以上は筑前地方の宮座の例であるが、京都郡の大分八幡、八社神社、大祖大神社などでも十分宮座制度が窺はれると思ふ、本縣全般の宮座に就ては各神社の項に就て見て貰いたい。

氏子と神社の關係も考察すべきこと多く、例へば、小倉市に就ては四つの神社の氏子がある、卽ちその一つは蒲生八幡宮の氏子で紺屋町以北の東小倉全部と室町附近の一部であつて、これは同社は昔規矩八幡宮と稱し寶町附近に鎭座されてゐたのを細川氏が小倉築城の際今の地に移したものであるからである。東小倉の南部は昔片野の鄕に屬し足立村と共に門司甲宗八幡宮の氏子であり今も同神社を氏神と仰いでゐる西小倉の大部と板櫃町の西部は昔から到津八幡宮、東部板櫃は篠崎八幡宮を氏神に崇めてゐる。かゝる氏子地域調査をやり、鄕土の神社が如何なる關係を鄕土生活に及ぼしてゐるかの研究も神社教育の一つであらう。

尙、神社を中心とした若者制度、產業と神社、神社經濟（筥崎八幡の油賣り）神人の政治上の活動等篤志家の研究を俟つべきものが多い。

特殊神事について

本縣神社に行はれる神事、主として各神社慣行の古傳祭その社に限れる行事などの特殊神事に就て述べてみると、先づ最も古きものとしては、李部王記に「和銅三年豐前隼人の神主和布刈の神事を始め奉る」とある門司市和布刈神社に行はるゝ和布刈神事である。この神事は下關の住吉神社に於ても同日同時刻に

行はれ、出雲の日御崎神社の末社熊野神社では陰暦一月五日夜行はれてゐる。いづれも元旦書初の御贄として土地所産の食饌を奉らんとする意義深い神事の一つである。なほ甲宗八幡の迎螺式も珍しい。

宮崎宮の放生會も古いもので、建仁寺塔中如是院年代記に「延喜十九始造安樂寺宮崎放生始」とあり、大江匡房の宮崎記に「五月騎射八月放生會以之爲重事靈驗威神言語同斷非紙墨之所及」とある如く、八月の放生會は五月の騎射祭と共に平安朝時代から宮崎宮の神事として重大されて來たのである、宗像神社の宗像祭（古式祭）亦有名で、一條兼良の著公事根源に載り、正平二十三年の年中行事に「十一月十五日望祭、十六日御神樂大神事、傳供御供付內侍舞云々」、應安八年の神事次第に「十一月十五日第一宮神事云々、內陣の御戸を開く、傳供祝詞如例座々に御供酒肴あり、御神樂、先神拜二、瓶子二、次人長申秘事、庭火は中座にて、先笛、次ヒチリキ、次琴、次寄合、次本歌、次末歌、次阿知女作法、次九首取物、榊本末幣本末、杖本末、篠本末、弓本末、劍本末、鉾本末、杓葛、九首取物如此、次近韓神本末、早韓神本末（人長八人女御廳舞）、志都野本末、千歳本末、早歌本末、朝倉本末（人長八人女舞）其駒本末、湊田本末篠波本末、弓立本末、宮人本末、歌次第如此、行列事、拜殿椽を廻る。この間は皇の歌うたふ、庭火の時も同じ樓門歌に早からかみ云々」と見え、當時の盛儀が窺はれる。此宮の放生會は貞永元年宗像氏經が始めた大祭であり、この祭り時女中市が立つのは珍らしい。

太宰府神社の神幸式（十月廿二日）も古く、康和三年大江匡房の始むるところと傳へ、二十三日榎寺なる公の舊寓に神行、天拜遙拜の秘法を修し、二十四日大和神樂竹の囃の奉納あつて還幸される神事である

一月七日追儺祭、同日の鷺替神事も亦有名である。享和二年長崎往來の菱屋半七の筑紫紀行に「鷺替。正月七日の夜酉の刻頃より參詣の老若集ひ來て、木にて作れる鷺といふ鳥の形を調て、相互に袖に隱し、鷺かへんと匐りて双方よりとり替ることなりとぞ。追儺。是も正月七日の夜にて、鷺替終りて後に、藥師堂にて行はる、先人を搦めて鬼面を被らしめ、松烟にて是をふすべ、堂の外を引きまはし、杖にて打ちたゝき、鬼捕へたりと匐れる事毎年絶えず、むかしは觀世音寺安樂寺武藏寺この三箇寺にて行ひしを、二箇寺は今絶てなしといへり」とある。この鷺の取替は、削り掛けを奪ひ合つてその年の豐凶を卜する神事の形式化したものと考へられてゐる。追儺の神事は、支那思想を入れて文武天皇の景雲三年諸國に疫病流行の際始められたと傳へ、神社でも鬼やらひの神事は古來一般に行はれ、香椎・住吉にもあつた。

三潴郡大善寺玉垂宮の鬼會もこの追儺祭の一つである。「正月七日の夜鬼會と云ふ事あり、尤大祭なりまづ月のいるまで社頭の火をいむ事其後も參詣の人などすべて火をいむ事なり、月の入る比より上ノ町の人、六尺廻り長さ十二三間ばかりのたいまつに火をつけて社を七度めぐる、其時鐘樓に十人登りて四方より鐘をひたつきにつくなり、此時は門松の眞にて撞木を作る事なり、たいまつはすべて六丁なり、給人といへるもの六人ありて是を作る一丁にかゝる人八十人ばかりみなはだかなり云々」と太宰管內志に記してゐる。尙、魔祓には獅子舞があり、浮羽郡柴刈村柳瀨玉垂宮、香椎宮、早良郡壹岐村熊野神社の獅子舞などそれぞれ面白い。

香椎宮の春秋祭は昔は盛儀であつた。古く三代實錄に「貞觀十八年正月廿五日癸卯、先是貞觀十六年太

宰府言、香椎宮毎年春秋祭日、志賀島白水郎男十人女十人奏風俗樂、所著衣冠、去寶龜十一年大貳正四位上佐伯宿禰今毛人所造也、年代久遠不中服用、請以府庫物造充之、至是太政官處分依請焉」と見えてゐる。

奉射神事（御弓神事）も、宮崎宮・志賀海神社に古から今に行はれてゐる。これは矢數の當否によつて年の天候豐凶をトし、式後庶人は的を受け歸つて祓除の符とする習俗あるが多い。寛文年間から始まつたと云ふ筥崎宮の玉取祭（玉せゝり）も亦物を爭つて豐作を祈る神事の一つであり、糟屋郡新宮磯崎神社、姪濱事代神社など各社に玉競り的行事がある。

春の季節に年の豐穰を祈つて春祭があり、秋刈入れがすんで豐作を祝ふ秋祭が各社にあるが、農業祭の一つに御田祭がある。彦山の御田祭（昔二月十五日今三月十五日）に就て、彦山記に「神輿の前にして御田高鵬といふ役のもの、農業をはじめ種子をまくより稻を刈取るまでの耕作の事をまねび、種子をまくとき參詣の民、まきし種子をひろひ一粒をもちかへり、種子にくはへてまく時、成就せずと云ふことなし、故にあらそひひろふことおびたゞし云々」とある。求菩提山の御田植祭（松會神事）も有名で京都郡白川村白山多賀神社、田川郡糸田村金村神社、住吉神社にも行はれ、鞍手天照宮の堂寄祭もこの例である。

粥占神事（筒粥神事）によつて年の豐凶を占ふことも各社に古くから行はれ、早良郡飯盛神社の粥試祭は當社創立の際下向した和氣清友が始めたと傳へ、筑紫神社の粥占祭も古く、浮羽若宮八幡にだらだら粥祭があり、久留米五穀神社の御粥試しは靈驗最もあらたかであるとしてゐる。遠賀郡水卷村久我神社で行ふ蓼祭は、蓼粉を入れた斗桶を村長以下氏子中の主立つた者が列座の中央へ持出し、その蓼粉を人々の顔に塗りそれが皮膚に浸潤すると否とでその年の吉凶をトふのである。朝倉郡松末村の大山祇神社の白粉塗祭もその一つであり、把木村阿蘇神社の泥打祭、大牟田祇園社の山蛇山の眼玉取りも豐凶をトふもの、筑紫郡春日神社の若水祭（一月十四日）の婿押しの時の樽取りも年穀の豐饒を祈るものであらう。

歌舞關係の風流卽ち鳴物の囃につれて踊る歌舞について見れば、八女郡星野村麻生池神社々前に行はれる反哉舞、三潴郡川口村江ノ神社の風流、八女郡白木村離石神社の風流、山門郡瀨高町文廣八幡宮の風流同郡鷹尾神社の破牟邪舞等があり、樂打は築上郡山田村大富神社と嘉穗郡稻築村若八幡宮の名が高く、築上郡狹間の貴船神社の天狗拍子、宇島町の足切神社の公富樂などもその一つである。尙、企救郡曾根町沼の樂打を始め京都田川等の各神社でも奉納されてゐる。杖樂としては田川郡川崎町正八幡宮の杖樂は古く鎭西八郎爲朝から傳はつたとある。風流踊系統の歌舞としては、直方の多賀神社祭禮歌から發生した日若踊や彦山の京都から輸入の風雅な盆踊がある。

操人形としては、築上郡吉富村八幡古表神社の傀儡子は有名なもので、同社拜殿で細男舞俗に所謂神相撲が行はれる。八女郡福島町宮野町の八幡宮燈籠人形も華々しいものである。能狂言系統の民間演藝と關係ある神社としては、門司甲宗八幡の楠原踊で、その解說によれば「文龜永正の間、大內義興卿當國守護職の時一とせ甲宗八幡宮の神主某義興卿に從うて上洛せし際、某堂上の作を乞得て歸り雨乞の踊を取り立てたものである云々」とある。嘉穗郡千手村芥田の村社愛嶽神社に奉納される雁金納も地狂言である。山門郡沖端村の船舞臺、秋月町垂裕神社の祭狂言等は歌舞伎的のものである。山門郡瀨高町大江の天滿宮に

正月廿日奉納される幸若舞は、大澤次郎幸次筑後山下城主蒲池氏の招聘に應じその臣下に教授したものとのことであつて、文學藝能史上價値あるものである。

神樂としては、築上郡下城井村赤幡村系統の京都郡城井村横瀬の若宮八幡神社の岩戸神樂は有名で、その曲目は米蒔・大祓・御たづき・御先・折敷・五行・蛭子・四鬼・兩鬼・五本劍・綱御先・兒屋根・鈿女・岩戸・湯立がある。福岡附近では筑紫郡岩戸村伏見神社の古風な神樂があり、福岡市田島の神樂、糸島郡高祖神樂はこの系統であり、曲目に神宮・祝供・多久佐・四社・榊・高所・兩刀・相撲・荒神・敷蒔・天神・問答・事代・御弓・猿田彦・大山・磯良・岩戸の十八がある。

高良山の陰曆六月一日十二月一日に行はれる河渡祭は他に類例のない特殊のみそぎに關する祭であり、水天宮の五月五日から三日間の河祭りの御船幸は美しい繪卷物を繰り展げ、蘆屋町雁木の菅原神社の舊六月廿五日夜の船御幸も美しく、柳河沖ノ端水天宮の舟舞臺も趣味がある。

小倉市八阪神社の祇園祭は關の先帝小倉の祇園と並稱された程盛大な祭であつたし、永享四年に始められたと云ふ博多櫛田神社の七月の祇園祭の追山も有名なものであり、久留米市篠山町素盞嗚神社の祭も夏の一名物である。小倉到津八幡の祭禮も古は隨分賑つたもの、京都郡犀川村生立八幡宮の五月の祭禮も盛大に行はれ、古くは祭禮當夜「犀川夜市の石枕」と云ふ奇習があつた、須佐神社の八坂臨時祭に准じた祭禮も古い。

住吉神社の相撲祭、篠山神社の藩祖入城式も由緒深く、宗像神社の交通安全祭、香椎宮の日韓記念祭、筥崎宮の日本海々戦記念祭など新しいが頗る意義がある。

美術建築に就て

本縣神社の古美術方面を考察するに、特別保護建造物に、桃山時代に再建されたものであるが住吉造を表現してゐる桁行四間梁間二間檜皮葺妻入の住吉神社本殿があり、天文十五年大内義隆の造營にかゝり延喜の結構に倣つたといふ筥崎宮本殿拜殿があり、その樓門は三間一戸入母屋造柿葺で文祿三年小早川隆景の造營にかゝり所謂桃山時代の豪華な特色を示し、軒下正面の「敵國降伏」の勅額は參拜者をして肅然たる感を起さしめる。又、その石鳥居も他に類例のない國寶である。英彦山神社の奉幣殿もその細部や木割その他の手法に桃山式の氣宇を窺ふことが出來背後の鬱蒼たる樹林と調和して一層の雄大美を享ける、現在の建物は元和二年再建のものに最近修繕を加へたものである。宗像神社の遙津宮は五間社流造柿葺、天正六年大宮司氏貞の建立したもので大工棟梁は博多居住日高與左衞門尉であり、以後度々の修理を經て居り、同宮拜殿は流破風造で、天正十八年小早川隆景の造營爾後數度の修繕があり、共に足利末期の建築樣式を傳へてゐる。香椎宮本殿は所謂香椎造で桁行三間梁間三間外陣左右獅子間各一間單層檜皮葺で屢々回祿にかゝり享保元年の造營である。太宰府神社の本殿は五間社流造一間の向拜殿左右一間の向唐風の車寄が附いてゐる、天正十九年小早川隆景の再建にかゝるもの、樓門は重層門である。池畔の末社志賀社は社傳に長祿二年の再建と記し、小建築乍ら大建築の面影を有し面白い。風浪神社本殿は三間社流造構造簡單

八幡神社

を奉迎す云々以下略。毎年六月二十九日、八月十五日九月九日御神幸ありしと云ふも現今はなし。

例祭日　九月九日

神饌幣帛料供進指定　明治四十一年十一月十日

主なる建造物　神殿、幣殿、拜殿、樓門、繪馬殿、神饌所、社務所

主なる寶物　御神鏡一面

境内坪數　千七十四坪

氏子區域及戸數　區域　柏の森區、山内　戸數五百戸

境内神社　志賀神社（志賀海神）
五穀神社（豐受姫命）
宮地嶽神社（勝頻神、勝村神）
惠比須神社（事代主命）
須佐神社（須佐男命、菊理姫命）
大行事神社（高木神）
日吉神社（大物主神）

昭和十九年一月二十五日印刷
昭和十九年一月三十日發行

〔非賣品〕

編纂兼發行者　福岡市大名町二二三番地ノ二三
財團法人　大日本神祇會福岡縣支部

印刷者　岐阜市七軒町十二番地
河田貞次郎

印刷所　岐阜市七軒町十一番地
西濃印刷株式會社
（中岐一）岐阜支店

發行所　福岡市大名町二二三番地ノ二三
財團法人　大日本神祇會福岡縣支部
電話西②二五九〇番
振替口座福岡一五一七番

配給元　東京市神田區淡路町二ノ九　日本出版配給株式會社

福岡縣神社誌

上卷

No. 87 10282
福岡県立図書館
K175 000 7